〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 （国　語）

東京都北区立桐ケ丘郷小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
１年	平仮名の定着（読み、書き）が不十分な児童が3割程度いる。言葉のまとまりとして平仮名が読めない、正確に視写ができない、特殊音節（促音、長音、拗音、拗長音）に誤りがある児童が多い。今までの生活経験や読書量から獲得している語彙の量にも個人差がある。また、聞かれていることに正対して答えることができない。	・学校と家庭で教科書の音読を繰り返す。 ・授業の開始時に5分程度の言葉の問題に繰り返し触れることで平仮名を習得し、語彙力を伸ばしていけるようにする。 ・授業では何を問われているのかを明確にし、正対した答えを伝えられるようにする。	・実態に合わせたワークシートや提示物を活用する。きたコンやデジタル教科書などを活用して教材の読み方を確認したり、画像や動画で言葉の理解を深めたりする。
２年	「文章を書く」ことの正答率が区の平均よりも低く、定着が不十分である。特に最後の記述式の問題では、無回答の児童が何名かおり、書くこと自体に苦手意識をもち、主体的に取り組むのが難しい児童もいることが分かる。	文章の書き方を身に付けるために、モデルを示して指導していく。一人一人が理解しているか、個別に添削指導していくことも必要である。感想や日記を書く活動も定期的に行う。授業では、発問を精選し、教材の核となる部分を捉えられるようにする。	・実態に合わせてワークシートや掲示物を活用する。型を用意して書くことに対する苦手意識を軽減し、根拠を明確にして書く力や文章を読み返す習慣を付けさせる。成果物を友達と読み合い、認め合う機会を豊富に設けることで、自信を付けさせていく。
３年	漢字読解（89・7%）など「知識・技能」の単元指導は成果を上げているが、「手紙を書く（49・7%）」等「思考・判断・表現」を要する記述指導が不足していると考えられる。インプット中心になり、学んだ知識を文章構成へ生かす実践的指導に課題があるか。	低正答率「書くこと（48．4%）」の改善に向け、ワークシートや構成メモ（思考ツール）を活用する。書き出す前に「誰に・何を・どのように伝えるか」を可視化させ、対話活動を通じて自分の考えを整理・推敲させるプロセスを重視する授業へ転換する。	・「書くこと」に苦手意識のある児童へ、文頭の型やキーワードを提示したスモールステップ指導を行う。 ・高正答率の漢字や語彙（73．1%）を活かし、相手や目的に応じた表現の工夫や長文記述に挑戦する発展課題を設定する。
４年	授業の中で「漢字を書く」「文章を書く」ことを苦手とする場面が多く見られた。教科書内容の読み取りを深める一方で、自分の考えをノートに文章で表す活動が十分ではなかった。また、ノートに書く際に思い出せない漢字を平仮名で書いてしまう児童がいたため、漢字を調べる活動も十分ではなかった。	・書き方の見本を提示してから個別の活動に取り組むことで、「自分で書けた」という経験を増やし、文章を書くことに対しての苦手意識を減らす。 ・ペアやグループ、ICT端末で自分の考えを共有する時間を設け、どのように文章を書けばよいのか学べる時間を継続して行う。	・漢字の反復練習を学校で取り組むだけでなく、宿題として家庭でも継続的に取り組ませる。また、教科書内容の学習を進める際に、自分の考えをノートに書く活動を多く設定する。 ・文章の書き方見本を提示しなくても、自分の考えを簡単に書ける学習内容に取り組ませる。
５年	漢字や文章を書くことに課題がある。しかし漢字の読みに関して目標値と比べても上回るあるいは同等の値である。学年の実態から見ても、前向きに読書をする様子が多く見られる一方で、漢字のテストや「書くこと」領域の学習に苦手意識を感じている様子が見られる。このことから、漢字や文章を書く練習を積む必要がある。	漢字の学習を苦手とする児童と得意とする児童との差が激しい。苦手な児童は学習に後ろ向きであるため知識の定着が困難である。そのためまずは文字数を少なくして取り組みやすい課題を提示することがあげられる。また毎時間の振り返りなど、どの教科でも書く場面を少しずつ増やしていく。さらに書くことに慣れるようにするために、一行日記や物語を自由に創作する活動など児童が気楽に取り組むことができる活動を日常的に行っていく。その際、既習の漢字はできるだけ漢字で書くよう声をかけることで、漢字を書く機会も同時に増やしていく。	・書くことに慣れるトレーニングとして日常的に取り組んでいく。例としては「先生あのね」と称してその日にあった出来事や楽しみなこと、相談事など思いついたことを伝えたいことを自由に3行程度で書く。これを週に2回朝読書の時間に取り入れていくことで、書くことに対する苦手意識の払拭につなげていく。 ・国語の「書くこと」領域では、ICTを活用しつつも紙にえんぴつで書くということも大切にしていきたい、例えば下書きをタブレット端末に打ち込み、青書をノートに書くなどハイブリッドを意識して活用していく。
６年	これまでの授業では、教材内容の理解を中心とした学習が多く、文章全体の構成や筆者の意図を根拠を基に考える活動、目的や条件に応じて自分の考えを書く活動が十分ではなかった。また、語句・漢字等の基礎事項について継続的な反復指導が十分に機能しておらず、知識・技能の定着に個人差が見られた。	・毎時間「読む・考える・話す・書く」を関連付けた学習活動を位置付ける。 ・学習課題に対して、根拠となる叙述に線を引く活動を継続的に行う。 ・条件付き記述問題を毎単元取り入れ、短い文章を書く機会を増やす。	・漢字・語句・短文記述の反復練習を週1～2回実施する。 ・読み取りの基本となる「誰が・何を・なぜ」を整理するワークシートを活用する。 ・複数資料を比較し、自分の考えをまとめる学習を取り入れる。 ・意見文や推薦文など、目的を明確にした文章表現活動を充実させる。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 （社　会）

東京都北区立桐ケ丘郷小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
3年	北区の様子について考える中で、気付いたことや疑問に思ったことから問題を見い出し、実際に調べる活動を通して社会科的な見方・考え方の基礎を養うことができた。一方で、資料から必要な情報を読み取り、問いに正対した答えを見い出すことにはまだ課題がみられる。	・はじめに提示する資料を限定し、「いつ・どこ・だれ・何」などの視点を提示して読み取りを促したり段階的な発問（数の大小、増減の比較など）をしたりして、資料から必要な情報を読み取る技術を丁寧に指導する。 ・問いのキーワード（「なぜか」「何か」「記号で」「正しいものは」など）の意識付けを図ったり、問いと回答のずれを全体で確認したりする。	・たしかめプリントやドリルパークなどの問題に繰り返し取り組む。 ・探求的活動に体験を取り入れながら、学習への理解を深める。 ・他の地域の資料を用いて、その情報を正しく読み取ったり、北区と比較したりする活動を行う。
4年	基本的な知識が十分に身に付いていない児童が多く、学習した内容を振り返ったり、既習事項を活用したりすることに課題が見られる。また、資料やグラフなどを見て、そこから分かることを読み取ったり、自分の考えをまとめたりすることを苦手とする児童も多い。	授業では、これまでに学習したことを振り返る時間を取り、学んだことをしっかり身に付けられるようにする。 資料やグラフを見る際には、「何が分かるか」「どこに注目したか」を問いかけながら、読み取ったことをもとに自分の考えをまとめる活動を取り入れる。	・補充的な指導では、教師と一緒に「何が分かるか」を確認しながら、少しずつ自分で考えられるように支援していく。 発展的な指導では、資料から読み取ったことをもとに、自分なりの考えを深めたり、友達と考えを比べたりする活動を取り入れる。
5年	北区が設定している目標値にはおおよそ届いている。しかし5年生になり単元で取り扱う知識や資料の情報量が多くなり、苦手意識を感じている児童が多くいる。またさまざまある資料から必要な情報だけを読み取ることに課題が見られる。	教科書のみでなく資料集を活用し、その中から情報を読み取りまとめる機会を増やしていく。また探究的に学習を進めていくことができるよう、資料の準備や発問の精選等、授業準備を丁寧に行っていく。また、都道府県に関する知識の定着が不十分である。小テストを行ったり毎時間1つクイズに出すなど日常的に知識の定着を図る取り組みを行っていく。	・都道府県の小テストを定期的に行う。毎時間47都道府県の中から1問クイズを出し知識の定着を図る。
6年	知識の習得が中心となり、資料を活用して考察したり、自分の言葉で説明したりする活動が十分ではなかった。また、学習した内容同士を関連付ける場面が少なく、社会的事象を多面的に捉える力の育成が十分ではなかった。	・資料・写真・グラフ・地図を活用した課題解決型学習を充実させる。 ・「なぜそうなるのか」を考えさせる発問を意図的に設定する。 ・ペア・グループ活動を通して根拠を説明する場面を毎時間設定する。	・地図・年表・資料の読み取り練習を継続する。 ・重要語句を関連付けて整理する学習を取り入れる。 ・時事問題と関連付けた探究学習を実施する。 ・自分で資料を集め、調べた内容を発表する学習活動を設定する。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 （算　数）

東京都北区立桐ケ丘郷小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
１年	繰り上がりや繰り下がりのないたし算やひき算の定着が不十分である。ブロックや指を使って計算するが、スムーズに使うことができない児童が1割いる。また、文章題では題意の把握ができず、何算をすればよいのか、答えに何を書いたらよいかがわからない児童が半数いる。	・数の構成（いくつといくつ）の理解を深めるために、授業開始時にミニ問題を継続して取り組ませる。 ・文章題に取り組むとき、わかっていることに丸、聞いていることに波線を引かせ題意を把握させ、何算をするのか、何を答えるのかを理解させる。	・計算カードやきたコン、プリントなどを活用して多くの問題に触れさせる。似た問題を繰り返し解くことで習熟をはかる。 ・ブロックや指をつかってもよいから、まずは計算を正確に解くことを意識させる。、自分の力で「できた」をたくさん実感させる。 ・発展的なプリントも用意し、自分にあった課題に取り組むことができるようにする。
２年	目標値は全ての項目でやや上回っていた。基礎的な知識・技能の定着が見られる。ただし、児童間での個人差が大きい点が課題である。設問別では、文章題の立式や問題作りの正答率が低く、修得した知識を状況に応じて働かせる「活用」に関する問題に苦手意識があると考えられる。	新単元の導入時には既習事項の復習を徹底し、スムーズな接続を図る。展開においては、具体物や日常生活に即した身近な課題を取り入れるとともに、文章題では条件（分かっていること）と問い（聞かれていること）を線引きさせることで、問題場面の確実な理解を促す。さらに、タブレット端末を活用して反復学習を促し、基礎・基本の確実な定着を図る。	少人数学習のメリットを最大限に生かし、児童の習熟度に応じたきめ細かな指導を展開する。習熟度が十分でない児童に対しては、家庭学習と連携して計算カードやドリルパークによる既習事項の復習を促すとともに、授業内では具体物の活用を徹底する。つまずきに応じた個別支援を行うことで、基礎・基本の確実な定着を図る。習熟度の高い児童に対しては、文章題の立式や問題作りといった発展的な「活用の場面」を授業内に意図的に設定し、思考力・表現力をさらに伸ばすアプローチを行う。
３年	・学年全体として、ほとんどの内容で目標を達成していると言える。しかしながら、「時こくと時間」「１０００までの数・分数」においては、目標値を達成しているとは言えず、定着が不十分である。 ・児童別の正答率をみるとその差は大きく、学習定着度の個人差が大きいことが課題である。	・ある時刻から一定時間前後の時刻を正しく求められるように、“○時ちょうど”までとその前後の時間を分けて考える方法を繰り返し指導する。 ・掲示用教具やデジタル教材などを活用し、視覚的に理解を深められるようにする。（時計、位取り表、分数タイルなど） ・少人数学習の良さを生かし、児童の習熟度に応じた教材を準備したり、思考と習得の時間のバランスを変えたりして理解を深める。	・スキル学習の時間を活用し、ドリルパークなどの基礎的な問題に繰り返し取り組むことで、知識・技能の習得を図る。 ・時計を見て行動するよう声かけをしたり、意識的に「○分前集合」「○分後開始」などと伝えるようにしたりして、学習内容を日常的に活用させるようにする。 ・学習定着度に応じて、算数パズルなどの発展的問題に取り組んだり、児童相互の教え合いなどを行ったりする。
４年	・ひっ算の演算方法の理解不足ではなく、途中の計算での誤答が多い。計算を丁寧・確実に取り組むための指導が不足していた。 ・既習内容を根拠にして、論理的な文章を組み立てる力に課題がある。例）「円の直径は半径の2倍である」ことを根拠に「直径17mmのビー玉を通すために、半径何mmの穴にすべきか？」を問うような問題	・ひっ算の繰り上がりや繰り下がりを省かず・見やすく・大きく書く習慣を着けさせる。 ・文章の意見と根拠の関係を理解させるために、国語（特に説明文の単元）と連携する。作者の考えが述べられている部分と、根拠の部分を読みとる活動を充実させる。	・実態に合わせた課題を用意し、達成感を少しでも味わえるようにする。 ・個々に解答するだけでなく、ペアやグループの中で解き方の説明をし合う場面を設ける。
５年	手順の周知に偏り、数の意味や図形の性質といった概念と結びつける指導が不十分である。操作や視覚的支援を通して「なぜそうなるのか」を探究させ、概念理解と技能の定着を一体化させる指導への転換が課題である。	数直線やモデル図を用いて単位量や位取りを視覚化し、概念理解を深める。図形領域では、作図根拠となる性質を対話で言語化させてから作図させ、思考と技能を一体化させた展開にする。	・数直線や具体物を用いた個別支援で、スモールステップにより概念の再理解と手順の定着を図る。 ・対角線等を用いた多様な作図方法の探求や、数の関係を説明・作問する活動で思考力を伸ばす。
６年	計算技能の定着状況を十分に把握しないまま新しい内容へ進む場面があり、基礎・基本の定着が不十分であった。また、自分の考えを図や式を用いて説明する活動が少なく、数学的な見方・考え方を深める指導が十分ではなかった。	・毎時間5～10分の計算タイムを設定し、基礎技能の定着を図る。 ・「なぜその式になるのか」を説明する活動を毎時間取り入れる。 ・ICTや具体物を活用し、視覚的に理解できる授業を展開する。 ・習熟度に応じた課題を設定し、個別最適な学習を進める。 ・誤答分析を授業に取り入れ、考え方を比較する活動を充実させる。	・朝学習や放課後補習で計算練習を継続する。 ・単元ごとの確認プリントを活用し、つまずきを早期に把握する。 ・発展問題や活用問題に取り組み、複数の解法を比較する活動を行う。 ・日常生活と関連付けた課題解決学習を取り入れる。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 （理　科）

東京都北区立桐ケ丘郷小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
3年	生活経験を生かして予想し、観察や実験を通して結果を得られたことはよく理解できていたが、学習用語や問題に対する答え方などは十分に身に付いているとは言えない。	・生活経験を生かした問題解決が行えるよう、発問を工夫する。また、体験を重視した学習を行う。 ・既知の内容を理科の学習用語を使って説明などができるように指導する。（例：葉っぱ→葉、根っこ→根） ・虫を特徴ごとに分類させたり、昆虫の体のつくりを部分ごとに色分けさせたりするなどして視覚的に理解を深められるようにする。	・デジタル教材などを活用し、観察・実験で十分な学びを得られなかったところを補充する。 ・テストを行う前に、たしかめテストなどで正しい理解をしているか確認する機会を作る。 ・既習の学習内容を生かしたおもちゃ作りを行い、楽しみながら学びを深められるようにする。
4年	学習時に「わかったこと」の確認をすること、知識・理解に関しての復習（反復練習）に関して、工夫・改善が必要であると考えられる。	思考の流れがわかる板書計画をたて、結論（わかったこと）の色を変えて視覚的にとらえやすくする。また、学習問題にさかのぼって確認することで、探究的な学習活動において一貫した課題であったことをとらえられるようにする。また、復習プリントを活用し、「問」にたいして「答え」をだす学習活動も繰り返し取り入れていく。	ICTを活用し、ドリルパークを行うことで、児童が手軽に繰り返し復習できる環境を整える。また、宿題としても併用する。ただし、ドリルパークだけでは、知識の定着が不十分になることが予想されるので、必ず紙ベースの練習問題と併用するようにする。
5年	知識や結果の記憶に依存し、モデル実験やICTを用いた視覚的支援による概念理解が不十分であった。また、データを収集・記録する活動に留まり、グラフの傾向から根拠をもって考察・言語化させる指導の不足が課題である。	生命・物質分野では、モデル実験やICTを活用した可視化・体感上の理解を深める。地球分野では、気温データの比較から、変化の理由を根拠とともに説明・対話させる考察場面を設定する。	・模型操作や動画視聴を多用しながら可視化すること、データ比較の手順化で基礎概念と考察力を再構築する。 ・空気の性質を生かしたおもちゃ製作や、年間データの分析など応用的な探究活動で思考力を深める。
6年	知識の理解に重点が置かれ、予想・実験・考察を一連の流れとして扱う指導が十分ではなかった。また、実験結果を根拠として説明する活動が少なく、科学的に考察する力の育成が十分ではなかった。	・毎単元で「予想→実験→結果→考察」の流れを徹底する。 ・実験結果を表やグラフに整理する活動を充実させる。 ・理由を説明する発問を意図的に増やす。 ・ICTを活用し、動画やシミュレーション教材を積極的に取り入れる。	・基本用語や実験器具の扱いを繰り返し確認する。 ・実験結果の読み取り練習を継続する。 ・自分で課題を設定し、探究的な実験に取り組ませる。 ・身近な自然現象について調べ、発表する活動を行う。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 （外国語）

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
5年	「話す・聞く」の活動は児童が主体的に取り組む一方、「書く」の活動に対しては苦手意識があるため後ろ向きになってしまう児童が一定数いる。「話す・聞く」と「書く」のバランスを意識して学習に取り組むことができるようにしていく。	・モジュールの時間にワークを進める。 ・語彙と表現のインプットをする活動を多く取り入れる。 ・フレーズとして英語を理解することができるように短いフレーズをくりかえし確認する。その際ペアやグループでの活動を取り入れる。	・テーマを設定して同じテーマで英文を何度か書く活動を取り入れる。その際ペアやがグループで確認する時間を設ける。 ・児童が書き、教師が添削したものを反映して書き直す。そうすることで正しい単語、文法を知ることができるとともに英文を書くことにも慣れ親しむことができる。
6年	既習表現を繰り返し活用する活動や、児童が主体的に英語を使う場面が十分ではなかった。また、「聞く・話す」と「読む・書く」を関連付けた指導が不足し、語彙や基本表現の定着に課題が見られた。	・毎時間の帯活動で既習表現を繰り返し活用する。 ・「聞く・話す・読む・書く」を関連付けた学習活動を計画的に実施する。 ・ペア・グループで英語を使う場面を増やす。 ・ALTとのやり取りを積極的に取り入れ、実際のコミュニケーション場面を設定する。	・基本語句・基本表現の反復練習を帯活動として実施する。 ・音読・リピート活動を継続し、音声と文字を結び付ける。 ・自分の考えや学校生活について英語で紹介する活動を取り入れる。 ・簡単な英語のプレゼンテーションやインタビュー活動を実施する。